

## I.Direct Force 夏季プログラム (8日10:00~12:00)

初めに基調講演として、義手の開発をされている近藤玄太様から『『ものがたり』としてものづくり』という演題でお話を伺った。幼少期をアメリカで過ごしていた近藤様は、帰国後は周りから冷たい態度を取られたり、左利きで Suica やはさみの使いづらさに戸惑ったりと、広義的な意味での「障がい」を感じていた。こうした経験が障がい者支援に携わるきっかけになったという。私たちは義手というと「障がいやけが、病気などで腕を失った方が腕の機能を復元するためのもの」と、比較的マイナスのイメージを抱いてしまうが、近藤様は障がいは一つの「個性」だと発想を転換させ義手を新たなおしゅれとして発信しようとしていた。留学などの国際交流などを通してより幅広い見識を広げることができたそう。大学はいい先生のもとに飛び込みたいという理由で東京大学大学院工学系研究科修士課程へ進んだ。その後ロボット開発の技術やビジネス、デザインを SONY で学んだ後にベンチャー企業を起こした。近藤様は、手と足と頭を動かし成功と失敗を経験すること、いろんな人の考えや価値観に触れ心の準備をすること、一生に楽しく働き、カスタマーに喜んでもらうことが重要だと教えてくださった。

「目立たなかったら負け」

グローバル化が進み、もはや海外との連携なしに企業マネジメントを行うことは不可能になっている現代社会。その第一線で戦っている、SOMOS International School 代表取締役の相馬様からそうお言葉を頂いた。お会いして数秒で、相馬様の語り口に私たちは圧倒されてしまった。世界を相手に戦っていくには卓越したコミュニケーション能力が必要不可欠なことを肌で感じた。企業を 0 から立ち上げた相馬様は時間、人脈、お金を効率的に使い、何が必要でそれにいくら支払うといったことも一人で考えなければならず、ここで日産や楽天で仕事をした経験が役立ったという。何かをしようと思ったとき、最初は 1 人でできるのだが仕事が多様になるにつれサポートが必要になってくる。自分と同じように仕事ができる人や自分が持っていないものを持っている人が集まって組織が形成されていくのだが、この人材育成が大変だと教わり、会社経営の難しさをお聞きすることができた。交渉では初対面の人と会ってから 0.3 秒で結果は決まる。欧米では日本より意見の主張が活発に行われるので自分の意見をしっかり持つだけでなく、「私はこう思う」と論理的に相手に強く説明しないと自分の主張は通らないと教えてくださった。

## II. 仙台二高 OB・OG 座談会 (8日19:00~21:00)

座談会では現役東大生から受験勉強に関する貴重なお話を伺うことができた。大学側は論文を読みこなすことのできる人材が欲しいので、大学入試の国語の問題では資料を読み込み説明に答える日本語能力が問われている。よって、設問の文章を小さい論文だと思っ

て読むことが肝要らしい。大学入試センター試験や東大入試ではトラブルが起こらないよう超一流のお手本となるような素晴らしい文章が使われているので、信頼して解けるのだそう。国語はどの学生さんも難しいと仰っており、演習量をこなすことでしか伸ばすことのできないものだそう。

英語のリスニングは帰国子女が多いため問題内容も非常に難しく、満点は不可能。それでもネイティブに近いものを求められるので、**Writing, Speaking, Reading, Listening**の4分野において短い時間でたくさん解く練習をしたほうが良いそう。特に単語や構文は1・2年の段階で身にしみこませることが重要だという。理解するだけでなく出来るようになるよう数学はチャートや**Focus Gold**、教科書レベルの問題集を何回も回して演習量を確保することが重要。忍耐力が鍵になるらしい。ここに挙げたのは代表的な例だが、東大生から教えられた勉強方法は非常に多種多様。1・2年の家庭学習は教科書レベルのもので良いという人もいれば、入試問題にも触れてみろという人もいて、異なる意見ばかりで迷ってしまった。

トップの学生の勉強方法を学ぶつもりで東大へ足を運んだが、むしろ勉強方法に正解はないというもっと重要なこと知ることができた。そんな中でも唯一東大生が皆口をそろえて言っていたのが「嫌々勉強するくらいならしないほうがいい」ということ。塾でも中学校でも「毎日コツコツ勉強しないと難関校へは行けない」と耳タコになるほど言われ続けた私にとっては意外な言葉だった。ここで勘違いしてはいけないのは、勉強しなくて良い訳ではないということ。勉強方法でも日頃の生活でも、常に東大生は「効率」という観点で説明していた。どう過ごせば目標を達成できるのかということ念頭に置き、勉強そのものだけでなく計画にも頭を使うことが大事なのだと学んだ。

### III. Fair Wind による東京大学キャンパス見学会 (9日9:00~15:45)

私たちはまず理学部数学科や教養学部がある駒場キャンパスを見学した。21 Komaba Center for Educational Excellence といった新しい施設やカフェなどがあり、おしゃれな印象を受けた。そのあとは駒場図書館を見学した。「東大にない本はない」と言われるほど東大は圧倒的蔵書力(数?)を誇っており、レポートを提出が遅れたときに文献資料が無かったという理由が使えないと嘆いている学生さんもいるほどである。キャンパスを散策して印象に残ったのは、一般の方が多く幼稚園児なども普通に遊んでいたこと。附属図書館も学外の方も利用可能ということで、東京大学は開かれたキャンパスであることが分かった。

駒場キャンパスから本郷キャンパスへは電車で移動した。仙台にも東北大学やとある高校のために造られた地下鉄があるが本数は10分に一本程度であるのに対し、東京はラッシュ時でなくても3~4分に一度の間隔で来るので非常に便利である。さらに近くに渋谷など繁華街もすぐ近くにあるので、買い物なども困らないと学生の方が説明してくださった。そんな本郷キャンパスは観光名所でもある。赤門や安田講堂、そして受験期に訪れたい三

四郎池などをキャンパス見学で紹介された。安田講堂は東大のシンボルマークであるが、背後にある理科棟が景観を損なっているため、写真を掲載するときは写真を合成して消すことがあるそう。

東京大学はリベラルアーツ教育を実践しており、入学時には学部がまだ決まっていない。基礎学部は科類ごとに定められているものの、文理を問わず幅広い知識を2年間学ぶことができる。その後2年次に成績優秀者を優先に学部の振り分けを行う「進振り」が行われる。中には文転や理転をする学生もおり、文科Ⅱ類から医学部、理科Ⅱ類から文学部などといった選択をする人もいる。文理選択を先延ばしにできるという意味で、東大半他大より大きなメリットがあるそうだ。文系学部へ進む人はほとんどが学部卒になる一方で、理系学部へ進学した人はほぼ大学院へ進学するといった違いもある。

法学部での模擬授業は刑事訴訟法に関するものだった。この授業は2人の先生が1つの授業を担当しているもので、とても新鮮に感じた。話の内容は難しかったが、それまで授業であまり触れることのなかった概念的な法のとらえ方やそこから発展した法学的な考え方について少しだけ触れることができたので貴重な体験となった。



研修中は一日中頭を使いハードではあったが、第一線で活躍されている方々の貴重なアドバイスや社会に出て働くこと、最高学府やその学生の深い学びについて充分すぎるほど見識を広げることができた。この経験は必ずや将来に役立つであろうと確信している。後は実践あるのみ。まずはきちんと目標を立ててコツコツ実行していくことから頑張っていこうと思う。